

## 高齢社会と高齢者像

澤 田 節 子

### 目 次

はじめに

#### I 高齢者像の抽出方法

#### II 対象者が捉えた高齢者像

- 1 短い言葉で捉えた高齢者像
- 2 高齢期の生活状況を捉えた高齢者像
- 3 対象者が捉えた内容の比較

#### III 高齢社会と高齢者像に対する検討

- 1 こころとからだの健康生活
- 2 高齢者の暮らしと家庭生活
- 3 生活の自立と地域社会

おわりに

### はじめに

総務省は、2005年国勢調査速報で日本が高齢化率21%に上昇、イタリアの20%を上回り、世界最高になったと発表、日本の高齢化が確実に進行していると新聞もトップ記事で出しており、少子高齢社会が確実に到来していることを示している[1]。また、2007年からはじまる団塊世代の定年退職が話題になることから推論できるように、今後、わが国は超高齢社会を迎えるのである。その中で高齢者が健やかな老年期を過ごすことが可能な社会にするため、健康寿命の延長を目指し地域で健康増進の取り組みがなされている昨今、時代の先端をゆく若者た

ちに対して高齢者の理解を深めてもらい、地域社会が一体となって対応することが必要不可欠である。

筆者は、「高齢化社会と福祉」の科目を担当するにあたり、受講生が、高齢者についてどのように理解し、かつ医療・福祉関係の内容にどのくらい興味を持っているか、把握する必要があった。そのため、高齢者に対してどのようなイメージを抱いているか尋ねたところ、「体が弱い人」「年金をもらっている人」ということであつたが、余り関心がないとしていた。そのため授業では、受講者が捉えている高齢者像・高齢者観を明確にし、人々が住みよい社会を指向するため、加齢に伴う変化を理解し、高齢社会における高齢期の生き方・暮らし方などを検討することとした。

高齢者像に関する先行研究では、1980年代から高齢者イメージとして形容詞対からなるSemantic Differential法（以下、SD法と略す）を用いた研究が報告されている[2]～[5]。その中での高齢者イメージは、「古い」「暗い」「地味な」というように否定的な面に傾いているが、他方では「優しい」「あたたかい」という肯定的な面もあるとしている。このSD法を活用して大学生の専攻分野別（看護・検査・リハビリ系）でみた高齢者のイメージでは、

看護系は老人の「温和性」「有能性」が高く、「社交性」「外交性」を低く捉えており、専攻分野における差はないとし、実際的には高齢者との触れ合いがイメージに大きく影響すると指摘している [6]。

また看護学生に老人イメージスケールを用いて調査した結果、学生は身体的老化イメージが強く、活動性や非協調性といったイメージが低くなっており、肯定的イメージと否定的イメージで両群間の差はない、と結論づけ高齢者のイメージと学生の生活背景についてまとめている [7]。この調査対象者が捉えた高齢者像は、加齢に伴う心身の機能低下である身体的イメージが強くなっていると共に、経済・社会的活動の衰退に伴う活動性を示すイメージがやや低くなっているのである。

高齢者像の研究で、内閣府の「年齢、加齢に対する考え方に関する意識調査（複数回答）」によれば、高齢者に対するイメージとしては「心身のおとろえ、健康面での不安が大きい」が72.3%、と最も高く、次いで「経験や知恵が豊かである」43.5%、「収入が少なく経済的な不安が大きい」33.0%と続き、「ボランティアや地域の活動で社会貢献している」が7.7%と低くなっていた [8]。この調査結果は、年齢・加齢に対する考え方を示唆しており、高齢者像を表す資料として貴重なものである。

次に大学生を対象に、高齢者体験をさせ理解を深めるという教育方法の工夫を試みたもので、高齢者擬似体験から自身の祖父母の特徴を振り返り、高齢者の身体的な特徴に関連した動きの不自由さや危険性を実感させ、高齢者の理解を深めることができたとするものである [9]。このように祖父母の日常生活で見過ごしていた事柄や高齢者に対する見方・考え方を知り、高齢者に関心をもたせ理解につなげていくというものである。これらのなかでは、医療

(看護)・福祉系の学生を対象とするものが多く、講義をもとにした一般短大生を対象とした高齢者像の検討は少なかった。

筆者の授業評価の一つとして、授業ごとの感想と合わせて高齢者に対するイメージについて記述してもらった。その記述内容は短文であったが、高齢者に対する学生の意識の実態を反映しており、自由な発想で端的な高齢者像を示す内容も含まれていた。

そこで、現代の若者の中で、短大生が捉えている高齢者像に着目し、彼らが高齢者に対し抱いているイメージを明らかにし、高齢社会について検討することを目的とした。

## I 高齢者像の抽出方法

対象者は、短期大学1年生で科目受講者45名(男性2名、女性43名)、時期は平成18年4月と7月に実施した。内容・方法は、授業開始及び終了時に、小カード4枚を渡し、短い言葉で「自分が思う高齢者のイメージ」について無記名で記述してもらった。なお、授業開始時の結果は、第2回目の授業時に一覧表にして全員に配布し講評した。その際、倫理的配慮として、記述は自由意思であり、科目評価には一切影響しないことを確約し承諾を得た。

分析方法は、記述内容を文脈単位でコード化し、類似した内容に分類・整理した。

## II 対象者が捉えた高齢者像

記述内容の結果は、授業開始時152件、授業終了後163件をデータとした。(表1)

### 1 短い言葉で捉えた高齢者像

(1) 授業開始時の「活動的な高齢者」は、表1・表2-(1)に示すように、計33件(21.7%)あった。まず、「経験や知恵が豊か」では、「知恵の塊」「豊富な知識と経験のある人」「尊敬で

表1 授業前後における高齢者像の記述数の概要

(単位:%)

分類項目	開始時の記述数 N=43	終了時の記述数 N=42
(1)活動的な高齢者		
経験や知恵が豊か	15( 9.9)	17(10.4)
元気で行動的	10( 6.6)	20(12.3)
社会参加・活動	8( 5.2)	8( 4.9)
小計	33(21.7)	45(27.6)
(2)高齢者の心身の健康		
心身の機能低下(病気)	57(37.5)	56(34.4)
健康的な生活習慣	12( 7.9)	8( 4.9)
小計	69(45.4)	64(39.3)
(3)高齢者の生活とサポート		
温和で円満な	19(12.5)	9( 5.5)
暮らし向き	18(11.9)	10( 6.1)
医療・福祉サービス	9( 5.9)	27(16.6)
小計	46(30.3)	46(28.2)
その他	4( 2.6)	8( 4.9)
計	152(100)	163(100)

出所：筆者作成

きる人」「伝統を知っている人」など15件あり、年輩者・経験者として肯定的な内容であった。次いで「元気で行動的」では「元気」「誰にでも話しかけてくる」「意外と動く」など10件で、元気で活動している高齢者に関心を示す内容であった。続いて「社会参加・活動」では、「ゲートボール」「昔の歌を歌う」「散歩が好き」「ボランティアをする」など8件あり、地域でスポーツを楽しんでいる高齢者の光景が目につく内容であった。

(2)授業開始時の「高齢者の心身の健康」は、表1・表2-(2)に示すように、「心身の機能低下」では「体が弱い」「耳が遠い」「腰が曲がっている」「体が不自由」「目が悪い」「白髪」「体力の低下」など、そして「頑固」「ボケが入っている」「よく物事を忘れる」「口うるさい」「同じ話ばかりする」など57件(37.5%)で最も多く、加齢に伴う身体・精神的側面を含めた

機能低下に関する内容が多かった。次いで「健康的な生活習慣」では「早寝早起き」「生活が規則正しい」「寝るのが早い」「健康に気を使う」など12件で、高齢者の日常生活がにじみ出ている多様な内容であった。

(3)授業開始時の「高齢者の生活とサポート」は、表1・表2-(3)に示すように、「温和で円満な」では、「笑うと可愛い」「笑顔が素敵」「優しそう」「結構若々しい」「いい人そう」など19件で、肯定的な形容詞の話し言葉そのままの内容であった。次いで「暮らし向き」では「金持ち」「年金をもらっている人」「自分の家」「一人暮らし」「漬物が好きな感じ」など18件で、日々の暮らし・生活状況が表れていた。続いて「医療・福祉サービス」では、「老人ホーム」「治療費がただ」「交通機関がただ」など9件で、サービスの受給状況を示す内容であった。

## 2 高齢期の生活状況を捉えた高齢者像

(1)授業終了時の「活動的な高齢者」は、表1・表2-(1)に示すように、「経験や知恵が豊か」では、「高齢者は知識が豊富である」「尊敬できる人」「昔の文化を教えてくれる人」「身体は弱っているが人生の先輩」など17件で、人生の先輩として敬う精神的側面の内容であった。次いで「元気で行動的」では、「高齢者は意外に元気な人が多い」「高齢者の7割以上は元気であることが分かった」「今の若者より元気な高齢者が多い」「高齢者は積極的に行動し、いきいきしている」「80歳になっても元気な人が多い」など20件で、元気な高齢者が強調され、地域で電車やバスの中で目にする光景が表れていた。続いて「社会参加・活動」では、「お年寄りも社会に貢献できることが分かった」「ボランティアなどをして町に積極的に出ている人もいる」「高齢者は意外といろいろな活動をしている人が多い」「元気で散歩し、お出かけして

いる人」「ボランティアで働き、社会に役立ちたいと考えている人が多い」など8件で、社会参加・貢献の状況が映し出されている内容であった。

(2) 授業終了時の「高齢者の心身の健康」は、表1・表2-(2)に示すように、計64件(39.3%)と多かった。「心身の機能低下」では、「身体が弱っている人」「高齢者は身体的に弱ってしまい大変」「腰が曲がっている人」「耳が遠い」「目が見づらくなる」「年をとると病気になりやすい」など、そして高齢者の病気では、「認知症がおこり怖い」「認知症になりたくない」「高齢者の苦労や大変さが分かった気がする」「75歳位になると死亡率・病気になる人が増えることが分かった」など56件(34.4%)あった。この項目は、主に加齢に伴う心身の機能低下を示すものと各種の病気や病気の怖さに関する内容で否定的なものも含まれていた。次いで「健康的な生活習慣」では、「高齢者は早寝早起きである」「漬物・野菜が好きで食事に気をつける」「健康によく気を使う」「病気は若いうちから気をつけなければいけない」など8件で、高齢者家族の暮らしぶりが表出されている内容であった。

(3) 授業終了時の「高齢者の生活とサポート」は、表1・表2-(3)に示すように、「温和で円満な」では、「高齢者は可愛らしい人」「高齢者はいつも明るく思いやりがある」「仕事を終えて自由な人」など9件で、若者が使用する流行り言葉も含まれた表現であった。次いで、「暮らし向き」では、「年金にかかわっている人」「高齢者の一人暮らしはかわいそう」「高齢期はお金に困りそうだ」「年金だけで生活できるのか疑問である」など10件で、暮らしの中で経済面の不安も入った内容であった。続いて「医療・福祉サービス」では、「介護を必要としている人が沢山いる」「いろいろな制度(介護保険など)で老後が守られている」「今はいろい

ろなサービスがあり、便利な生活ができている」「高齢者の医療費が大変そうで、今問題になっている」「今は、施設に入るか、自宅にホームヘルパーを依頼するか選択できる」などであった。加えて「日本では家族のあり方が変わり、高齢者への対応や接し方も変わってきた」「高齢者は思ったより健康であるが、身体が弱い部分もあるので助けてあげたい」など27件で、諸制度や高齢者への支援、接し方に関する変化の内容が表現されていた。

### 3 対象者が捉えた内容の比較

授業前後の変化としては、「元気で行動的」「心身の機能低下のうち病気に関する内容」「医療・福祉サービス」が増加していた。記述内容でよく似た表現が複数みられたものは、「知識や経験がある人」「尊敬できる人」「笑うと可愛い」「早寝早起き」「年金をもらっている人」「体が弱い」「耳が遠い」などであり、いずれも高齢者を特徴づけるものであった。次に「知恵の塊」「意外と元気」「体が弱い」「耳が遠い」「早寝早起き」「金持ち」「老人ホーム」などは、各分類項目を特徴付けるものとなっていた。

授業終了後は、「高齢者はいろんなことを体験し知恵の塊」「高齢者は強がりだけれどとてもさびしがりやである」「高齢者は身体面も経済的な面も大変だ」「福祉がとても盛んになってきたので、老人ホームに入る人が多くなった」というようにキーワードは同じであるが、文章が少し長くなり見方や捉え方に幅が出てきていた。そして、「高齢者の苦労や大変さが分かった」「年を重ねると身体のおちこちが不自由になってしまい大変である」など、「・・・大変さ」「・・・大変だ」という用語で高齢期の生活状況を表す内容であった。

その他をみると、「高齢者像は、『元気、ボケが入っている、金持ち、病院へよくいく、年金』

であったが、授業後の現在は、『元気な人、ボケが入ってくる、全員金持ちというわけでない、身体にガタがきている、年金だけでは暮らせない』で余り変わらない」と記述している。このように高齢者は、活動的で元気な人が多くいるが、心身の機能として精神面でボケが入り、身体も衰えてくる。そして高齢者は金持ちと思っていたが、個人差があり年金だけでは、暮しが大変であることが推測できる内容でもあった。つまり加齢に伴う心身の衰えを知り、授業前後で僅かに変化がみてとれる端的な高齢者像であった。

次に「授業前と、今思っている高齢者像は少し変わった」「高齢者問題について、少しでも理解が深まった」とするものが5件であった。一方「高齢者は大変だと思うが、高齢者像は余り変わらない」と、余り変わらないとするのが2件であった。

### Ⅲ 高齢社会と高齢者像に対する検討

#### 1 こころとからだの健康生活

わが国では急激な高齢化に対応するため、介護保険制度をはじめとして保健医療福祉施策が実施されるなかで、老化のメカニズムの解明や老年疾患の研究も盛んに行われており、合わせて将来推計人口や人口構成割合の推移などが報告されている。高齢期の心身の状況について、大島[10]は、「老いるということは、衰えることであり、生活が不規則になる過程でもある。その過程をどのように過ごすかということである。・・・中略・・・豊かさとは、ひとが尊厳を失わずに輝いているところにしかない」と、人権尊重の立場で発言されている。この健やかに豊かに生きるとは、誠に美しい言葉の響きであるが、要は人が人として尊重され、その人の生活の質を向上させ、自己の信ずる道を静かに歩いていくということであろう。

高齢者の心身の健康では、「耳が遠い」「体が不自由」「物忘れ」「ボケが入っている」などに代表されるように、加齢に伴う心身の衰えに関する内容で、外観上の特徴を示す機能上の変化を捉える表現が多くみられるのである。これに対し、「経験や知恵が豊か」では年輩者として培ってきた経験や知恵が生かされ、「尊敬できる人」「感謝の気持ちがもてる人」など肯定的な記述があったことである。これら高齢者像の内容は、ものの見方・考え方など、その人の高齢者観が反映されるものであることから、彼らの言動を尊重し大切にしたい内容の一つである。また、心身の機能低下の中では「祖父母は言ったことや今までやっていた事をすぐ忘れたりすることについて、少しずつ理解できるようになった」というものもあり、心身機能の衰退は日常生活に影響を及ぼすことになるので、誰にも計り知れないものでもあるが、若者が理解しようとして意識してくれただけでもよいと思う内容である。

老化の特徴について、黒田[11]は以下の4点を挙げている。①老化の進行の度合いには、個人差が大きいこと、②心身の機能は使用しないと早く衰えていくこと、③老化は比較的早い時期から生じること、④身体が機能低下していく度合いは臓器により差があることである。これら老化の特徴や老年疾患の最低限の知識は、やがて来る高齢期に備えて誰もが理解しておく必要がある。

青年期という身体的活力にあふれている学生がみた高齢者は、身体的老化や活動性の衰退などが目立ち、高齢者個々の潜在的能力に気づくことなく、単に庇護すべき対象であるとしている[12]。これは本稿においても同様で、高齢者の心身の機能低下や活動性の衰退という状況から、支援・介護すべき存在であることを挙げ、このような表現になっているものとする。

の反面、自分が高齢者になったときのことを考えるようになり、高齢者を大切にしなければというように、自分の将来を見据えて支援の必要性に気づいているのが印象的である。このように高齢者の理解ということをとおして、自らの老後や健康管理に対する認識が深まっていくことが望まれるのである。

次に「病気」については、高齢者に多い糖尿病からきた脳梗塞の事例と認知症をとりあげたが、インパクトがあったのは認知症である。この授業内容は、「認知症の母親を看病していた息子」の新聞事例を活用した。現在のところ認知症そのものは、解明されていないだけに誰もが恐いし、病気になりたくないと思っており、そのままを表現している。

認知症に関する調査として、15歳～69歳を対象とした認知症高齢者に対するイメージを測定しているが、否定的イメージに偏る傾向があると述べている [13]。これらは認知症による表面的な大変さだけが、報道される傾向もあり、否定的イメージは払拭できない。今後、認知症に対する理解を深め、介護の方法についての知識・技術の普及を図っていくことと、1人で介護を背負わないことなどの介護負担の軽減に努めていくことが重要であり、地域社会全体で高齢者・障害者を支えていくことができる高齢社会にしていくことである。

これらのなかで心身の機能低下に関する言語は、一部思慮深さを欠いた言動もみられるが、短い文章のためこのような話し言葉の表現になったものと解釈している。青年期の今は、アイデンティティーの確立に向けて苦しみつつ外見重視で生きているところもあり、高齢者に対して十分に配慮ができていないものと思われる。

高齢社会白書によると、高齢者に対する差別や偏見が、「大いにある」と「多少ある」を合わせると6割以上であり、20歳代、30歳代の

若い世代ほど「ある」とする割合が高くなっている [14]。加齢に伴う心身機能の衰退というのは、否定的なイメージをもち偏見や差別を呼び起こすものなのであろう。つまり心身機能の衰退という現象は、高年齢に達すれば個人差があるとしても、それは自然の成り行きで、誰もが行きつく先でもあるが、その年齢に達し実感しない限り心情を推しはかることは難しいことかもしれない。これらから高齢者像の根底となる老年観の理解高揚性については、肯定的なイメージをもつということが評価基準になっているようであるが、否定的な内容も取り入れ考えさせていく必要があると再認識した。

## 2 高齢者の暮らしと家庭生活

高齢社会を考える場合は、北欧など諸外国の福祉国家のように自立した豊かな老後生活が理想である。内閣府の「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」をみると、日本とスウェーデンの比較では、年齢構成比でスウェーデンの高齢者の80歳以上が20.8%であり、日本の10.1%に比べるとほぼ倍近く多く、日本より年齢層が高い人が多くなっている。また家族との同居状況では、一人暮らし（単身世帯）高齢者の割合が日本の9.6%に対し、スウェーデンは41.7%である。スウェーデンの高齢者世帯は、ほとんど「単身または配偶者またはパートナー」のみの同居となっており、子どもや孫との同居率は極めて低くなっている [15]。西欧と日本とでは、家族のあり方・考え方、そして個人の自立の仕方も異なっているので一概にいえませんが、日本も徐々に変化してきている状況にある。

日本における高齢者との同居率が63.5%と比較的高い高齢者との交流について、悩みごとなどを相談するという実態からみると、祖父母との交流は同居していても表面的な接触であり、交流の深まりは別居者と差がない。同居者の方

が高齢者のイメージが低く（否定的）になっており、同居体験者は祖父母との現実的な体験から高齢者イメージをもつに至ったとしている[16]。これは、祖父母との同居体験が必ずしも高齢者の理解に結びつくものではないことを示している。ときに高齢者が孫に声をかければ「くどい」とか「うるさい」と言われてしまい、反対に気遣い・遠慮している傾向にあり、世代間の交流が希薄になっていることも確かである。日本社会は、急激な高齢化に伴い家族形態や家族構成が変化してきていることから、同居の有無に限らず、祖父母の存在を活用し、活力ある社会にするためにも高齢者と語り合う機会、交流の場を作っていくことが重要であろう。

日本における子どもや孫との付き合い方では、「いつも一緒に生活できるのがよい」（2000年）でみると、日本が44%、韓国38%、ドイツ15%、アメリカ9%、スウェーデン5%であるのに対し、「ときどき会って食事や会話をする方がよい」では、アメリカ66%、スウェーデン65%、ドイツ61%、韓国46%、日本42%となっている[17]。この調査では日本・韓国が同じような傾向になっているが、時系列でみると日本も「ときどき会って食事や会話をする方がよい」の割合が上昇してきている。日本人の家族のあり方には世代間の違いもあるが、一緒に生活することが最良とする密度の濃い付き合い方を望む人と、子どもとの同居を必ずしも望まない人もあり、高齢者自身の意識も徐々に変わりつつあることが調査などから出てきている。このように「個人主義」の原理の浸透性の差が結果につながっているものと分析している。

次に、暮らし向きでは、「金持もち」とするものが複数ある。総務省の調査結果などで高齢者の貯蓄率の高さも報告されているが、金持ちばかりでない。特に後期高齢者には、寝たきりで介護を受けている人や慢性疾患をもち、医療

費に窮し経済的に大変な暮らしをしている人も少なくないのである。このように格差があるとしても、今の高齢者たちは、戦後の厳しい経済状態の中で育ち、日本の発展を支え活躍してきた人たちであることを忘れてはならない。

引き続き公的年金については、全ての国民が加入する国民年金の仕組みについて触れたのみで、年金給付については膨大なものとなるため論じていない。日本の年金制度は、徐々に確立されてきており、高齢者世帯の6割以上が年金だけで生活しているのが実態である。現状では年金の額が一律でないことから、年金だけでは生活費が賄えない高齢者世帯もあるので、経済的な保障が重要になるのである。一方、若い世代を中心に国民年金離れがみられていることが課題となっている昨今であり、年金制度の意義や仕組みを理解できるようにしていく必要性を痛感した次第である。この授業では年金について少し触れたことから、「年金をもらっている人」が「年金だけでは生活ができるか疑問である」など、年金制度の複雑さや年金給付額の少なさを知ったのであろう。

昨今、新聞・テレビなどでは、人口の高齢化と社会保障の動向などを数値で示しているが、取り上げられる事例では、「一人暮らしの悲惨さ」「寝たきり高齢者の介護疲れ」などの否定的なイメージの報道も多くなっている。高齢社会のあり方や高齢者を理解するには、教育の場も重要であるが、身近な家庭における両親と祖父母との関係が大きく影響していることや、インターネット社会となり報道の果たす役割が大きいのである。今後、団塊世代の退職は、いろいろなことに挑戦し、より个性的で積極的に活動をする人も増加することから、高齢社会での暮らし方・生き方も変わっていくものと思われる。

### 3 生活の自立と地域社会

高齢社会となり高齢化率が高くなっていく日本社会は、若さを失い、生産性・効率性にかげりが見え出し活力がなくなっていくのであろうか。いや、高齢先進国に相応しい活力ある高齢社会、健やかで快適な高齢社会を目指して行くことが肝要であり、それに対応できるような施策が求められるのである。

活動的な高齢者のなかでは、意外に元気な人が多いことや人生を楽しく送っている人が多いことなどを知り、大半の高齢者が元気であると捉え、今まで余り関心がなかったが、立ち止まって周囲を見たところ、元気で行動的な高齢者がいたというように興味・関心を示し始めてくれたことで、今後が大いに期待できそうである。

また、意外性を込めた表現として「高齢者というのは、余り元気がない人のイメージがあったが、7割以上の人が元気だということに驚いた」というように高齢者像の変容が読み取れる内容もある。一般に高齢者は65歳以上の人をさすのであるが、若者たちは、後期高齢者以上を想定する表現で、「皮膚がよぼよぼ」「考えが古い」「病院のにおいがする」などという否定的な面を示す内容もある。一方で、「物知り」「笑顔が素敵」「いつも明るい感じ」などと、内面から出ている魅力的な人物像や年輪を重ねた人々の笑顔などを捉えて愛すべき高齢者とみているようである。これからの高齢者は、生き生きとした生き方、暮らし方を若者たちに示していく必要があると考える。

2004年内閣府が全国の60歳以上の男女に「高齢者って何歳から？」という調査をした結果では、70歳以上と回答した人が46.7%の半数近くを占め、75歳以上とした人が約2割に達したとあり、高齢者の定義が徐々に高くなってきている様子がうかがえるとしている[18]。このように高齢者自身の認識も変化し定義の見直

しも必要になってくると思われる。

次に、社会活動については、ボランティア、ゲートボール、社会貢献に関する表現がみられたが、数的には少なかった。日常的に身近でみている風景がゲートボールになったものであろうが、社会活動の種類には、町内会・自治会、学習、ボランティア、趣味や娯楽のサークルなどが挙げられ、地域で活躍している人もいるはずである。社会活動の実際をみると、「活動しているもの」と「活動参加意向のあるもの」「全く活動していないもの」とがあり、このうち非活動要因の分析では、参加意向があっても参加していない人があり、この人たちに対して、参加の方向に勧めていく必要があると述べている[19]。若者にも認知され、世代間の交流の場を拡大させていくためにも、社会参加が重要である。

高齢社会白書によれば、この1年間社会参加したものは、54.8%であり、活動内容は「健康・スポーツ」が25.3%最も高く、次いで、「趣味」「地域行事」「生活環境改善」となっていたと報告している[20]。筆者の知人でも毎日曜日には、スポーツに汗を流し体力もあり健康そのもので、仕事も旺盛にこなしている高齢者がおられる。この社会活動への参加は、社会貢献と共に自己の生きがいと結びついている人も多くいることである。

このところ、各種の専門誌や「生きがい研究」の雑誌などでも「生きがい」について、多くの方が発言されているが、年齢にとらわれず自分の能力と責任の範囲で社会参加なり、社会貢献していけるようにしたいものである。とかく、高年齢になると家に閉じ困りがちになると指摘されているが、何らかの形で地域社会と関わりを持ち続けられる生活が望まれるのである。

医療・福祉サービスについては、「老人ホーム」の記述が複数あり、高齢者を代表する施設



と捉えたものである。この老人ホームは、20年位前ならば暗いイメージをもって語られたが、そのような表現はなく、「今は、施設が充実し老人ホームで暮している高齢者も元気である」「福祉がとても盛んになってきたので、老人ホームに入る人が多くなった」など、映像から想像した内容も含まれているが、施設入所の考え方が変わってきていると思われる。また、高齢者を支える基盤となっている介護保険制度については、「介護保険などがあり、高齢者は助かっている」「高齢者福祉制度はいろいろあり、知っていると得する」というもので介護保険に関連する情報が入ったというものであろう。この社会保障に関する内容は、年金、医療、福祉制度についてその存在を知り、興味・関心を示す機会とはなったが、学習の成果とはいえない。

少子高齢社会のなかでの高齢者は、それぞれ多様な生き方・暮らし方をされており、すべての人にあてはまるような理想的な高齢者像を描き出すのは容易ではない。確かに昨今の高齢者は元気そうであるが、個人的には身体のどこかに持病や痛みをもっている人も多くいるのである。しかしながら、高齢者の多くは一病息災という言葉もあるように、自分なりの生きがいを持ち、健やかに快適に暮していくことを願っているのである。

## おわりに

記述内容から高齢者像として、「こころとからだの健康生活」「高齢者の暮らしと家庭生活」「生活の自立と地域社会」の3点から検討した。第1は、心身の健康が最も重要であり、全ての基盤となることから、健康管理について普段から心がけておくことが大切である。第2は、高齢者として経験や知恵を生かし、暮らしもできるだけ自立して、心豊かに生活をしていくことである。第3は、医療・福祉サービスを利用

しつつ、社会参加をし、あらゆる場でいきいきと活力ある高齢者になることが理想である。

高齢者の心身の健康と医療・福祉サービスが共に件数が多かったことから、高齢者像を考える場合に、心身の健康が重要であり、若いころからの健康的な生活習慣が重要な指標となることはいうまでもない。加齢に伴う心身の衰えは、比較的早い時期から生じることを認識し、自分の40～50年後を見据えた表現に、現代若者の可能性を感じると同時に、もう一步踏み込んでどのようにすれば高齢者が健やかに気持ちよく生活できるようになるか、より一層関心を高めさせることが肝要であると痛感した次第である。

本稿は、あくまでも短大生に対する授業開始及び終了後の記述内容の分析から傾向をみたものであり、高齢者像の全てではないことももちろんであるが、「高齢者研究」の一里塚として、今後の一資料としていきたいと考えている。

表2 授業前後における高齢者像の記述内容

表2-(1) 活動的な高齢者

(単位:件数)

中項目	開始時の細項目(記述内容)	終了時の細項目(記述内容)
経験や知恵が豊か	①知恵の塊(3) ②豊富な知識と経験のある人(3) ③尊敬できる人(2) ④伝統を知っている(2) ⑤物知り ⑥賢い人 ⑦昔の話を教えてくれる人 ⑧ご飯を作るのが上手 ⑨字がうまい	①高齢者は知識が豊富である(4) ②多くの知恵・知識を持っている(3) ③尊敬できる人(3) ④昔の文化を教えてくれる人(2) ⑤身体的に弱い部分もあるが、考え方はしっかりしている ⑥高齢者はいろいろなことを体験した知恵の塊 ⑦お世話をしてくれる人に感謝の気持ちを持てる人 ⑧高齢者は昔の経験や自分の人生を後世に伝えてくれる人 ⑨身体は弱っているが人生の先輩
元気で行動的	①元気(3) ②誰にでも話しかけてくる(2) ③意外と動く(2) ④元気な人が多い ⑤度胸がある ⑥社交的	①高齢者は意外に元気な人が多い(4) ②高齢者の7割以上は元気であることが分かった(4) ③今の若者より元気な高齢者が多い(3) ④高齢者は積極的に行動し、いきいきしている(2) ⑤80歳になっても元気な人が多い ⑥友人との会話が楽しそうである ⑦最初、高齢者のイメージはよぼよぼで弱い存在だと思っていたけれど、健康で毎日いきいきしている人が多い ⑧今まで思っていた高齢者は弱っていたり、人の助けを必要としている人だったけれど、そのような人ばかりでなく、自分で何でもできる高齢者もいる ⑨高齢者というのは、余り元気がない人のイメージがあったが、7割以上の人が元気だということに驚いた ⑩今まで一緒に住んでいた祖父や近所の高齢者は、元気なイメージがあった。逆にドラマなどでみる寝たきりで弱いというイメージはない ⑪人生を楽しく送っている人が多い
社会参加・活動	①ゲートボール(2) ②昔の歌を歌う ③散歩が好き ④ボランティアをする ⑤人の世話をやく ⑥働き者 ⑦草取り	①お年寄りも社会に貢献できることが分かった ②ボランティアなどをして町に積極的に出ている人もいる ③高齢者は意外といろんな活動をしている人が多い ④元気に外で散歩し、お出かけしている人 ⑤高齢者は加齢により生活や活動が変化する ⑥これから高齢者が増えていくので、高齢者も住みよい社会になっていくとよい ⑦ボランティアで働き、社会に役立ちたいと考えている人が多い ⑧私達が困った時には、頼りになるしボランティア等も積極的にしてくれている

出所:筆者作成

表2-(2) 高齢者の心身の健康

(単位:件数)

中項目	開始時の細項目(記述内容)	終了時の細項目(記述内容)
心身の機能低下(病気)	①体が弱い(6) ②耳が遠い(6) ③腰が曲がっている(4) ④顔がしわしわ(4) ⑤体が不自由(3) ⑥歩くのがゆっくり(3) ⑦目が悪い(3) ⑧体が小さい(2) ⑨白髪(2) ⑩体力の低下 ⑪皮膚がよぼよぼ ⑫入れ歯 ⑬足が悪い ⑭足腰が弱い	①身体が弱っている人(4) ②高齢者は身体的に弱ってしまい大変(3) ③腰が曲がっている人(3) ④外見(顔)がしわしわになる(3) ⑤耳が遠い(3) ⑥目が見づらくなる ⑦老年期は年々身体が弱っていく。 ⑧年をとると病気になるやすい ⑨どこにいくにも身体が疲れて大変そう ⑩足腰が悪いから席を譲ってあげよう ⑪身体のいろんな機能が衰えていく ⑫身体能力が衰える ⑬足腰が弱く歩くのが遅い ⑭身体が思うように動かせない人 ⑮年をとると骨折しやすくなる ⑯年を重ねると身体のあちこちが不自由になってしまい大変である ⑰年をとると心臓が大きくなったりする
	①頑固(4) ②ボケが入っている(2) ③よく物事を忘れる(2) ④口うるさい(2) ⑤昔と比べて新しいものを嫌う ⑥同じ話ばかりする ⑦若者ができることができない ⑧考えが古い ⑨文句が多い ⑩さびしがりや ⑪鈴がついている人が多い ⑫病院の臭いがする ⑬病院に通うのがすき	①認知症がおこり怖い(9) ②認知症になりたくない(3) ③高齢者の苦労や大変さが分かった気がする(2) ④年をとるといろいろと病気も出て大変だ(3) ⑤身体の老化と共にいろいろな病気や合併症も起こる(2) ⑥認知症になると急に変な行動を取ったりするので大変である ⑦年をとると忘れぼくなる ⑧年よりはせっかちな人とのんびりした人との差がある ⑨高齢者は強がりだけれどとてもさびしがりやである ⑩75歳位になると死亡率・病気になる人が増えることが分かった ⑪脳卒中や糖尿病など病気に罹りやすくなる、糖尿病の恐ろしさを知った ⑫人生では病気もするし、体調も崩しやすくなるだろうけれど、いつかは自分も順番だと考える事ができるようになった ⑬私の祖父母は、言ったことや今までやっていた事をすぐ忘れてたりすることについて、少しずつ理解できるようになった ⑭一部の病気の人を表面(テレビ・新聞など)に出し、高齢者全体の問題にしている
健康的な生活習慣	①早寝早起き(6) ②生活が規則正しい(2) ③寝るのが早い ④健康に気を使う ⑤朝が早い ⑥小食	①高齢者は早寝早起きである(2) ②漬物・野菜が好きで食事に気をつける(2) ③健康によく気を使う人 ④施設に入りたくないから健康に気をつけている人が多い ⑤病気は若いうちから気をつけなければいけない ⑥病気をもっているでも元気で暮らしている人が多い

出所:筆者作成

表2-(3) 高齢者の生活とサポート

(単位:件数)

中項目	開始時の細項目(記述内容)	終了時の細項目(記述内容)
温和で円満な	①笑うと可愛い(4)、②笑顔が素敵(3) ③優しい(3)、④結構若々しい(2) ⑤いい人そう(2)、⑥心が広い(2) ⑦いつも明るい感じ ⑧思いやりがある ⑨物を大事にする	①高齢者は可愛らしい人(4) ②高齢者はいつも明るく思いやりがある ③年をとって面白い人もいる ④年よりは度胸がある ⑤高齢者は身体は弱いけれど反対に笑顔がよい ⑥仕事を終えて自由な人
暮らし向き	①金持ち(7) ②年金をもらっている人(4) ③自分の家、④一人暮らし ⑤煎餅がすき、⑥和菓子がすき ⑦和風ばい ⑧漬物が好きな感じ ⑨今まで苦労してきた感じ	①年金にかかわっている人(4) ②高齢者の一人暮らしはかわいそう ③高齢者もそれなりに苦労をし大変だ ④高齢期はお金に困りそう ⑤高齢者は身体面も経済的な面も大変なんだ ⑥一人暮らしをしている人も多い ⑦年金だけで生活できるのか疑問である
医療・福祉サービス	①老人ホーム(4) ②治療費がただ(2) ③交通機関がただ(2) ④席を譲ってあげるべき人	①介護を必要としている人が沢山いる(5) ②いろいろな制度(介護保険など)で、老後が守られている(3) ③今は、いろいろなサービスがあり便利な生活ができている(2) ④老人医療に多くのお金が使われている ⑤医療保険や介護保険などいろいろな制度が奥深くある ⑥介護保険などがあり高齢者は助かっている ⑦高齢者の医療費が大変そうで、今問題になっている ⑧老人福祉法や老人保健などによって保護されている ⑨年金制度、介護保険の実態、福祉制度は複雑である ⑩高齢者福祉制度がいろいろあり、知っていると得する ⑪今は施設に入るか、自宅にホームヘルパーを依頼するか選択できる ⑫今は、施設が充実し老人ホームで暮らしている高齢者も元気である ⑬福祉がとても盛んになってきたので老人ホームに入る人が多くなった ⑭高齢者が安心できる施設や制度が必要である ⑮高齢者は無料だから市バス・地下鉄をよく使う ⑯日本では家族のあり方が変わり、高齢者への対応や接し方も変わってきた ⑰高齢者は思ったより健康であるが、身体が弱い部分もあるので助けてあげたい ⑱私の祖父母にいつかいろいろな変化が表れても、びくつくせず落ち着いて優しく接してあげたい ⑲年をとって気分的にも落ち込んでいる人でも、周りの人の接し方で元気にすることができから私もそうしてあげたい ⑳自分が高齢者になった時のことを考えるようになり、高齢者を大切にしなければと思った ㉑高齢者は寝たきりの人ばかりだと思っていたけれど、ボランティアの人に助けってもらいながら生きている人もいる
その他	①天気予報を見てそう ②パーマが多い ③高齢者マーク ④バス占領	①授業前と、今思っている高齢者像は少し変わった(3) ②高齢者問題について、少しだけ理解が深まった(2) ③高齢者は大変だと思うが、高齢者像は余り変わらない ④高齢者像は、「元気、ボケが入っている、金持ち、病院へよくいく、年金」であったが、授業後の現在は、「元気な人、ボケが入ってくる、全員金持ちというわけでない、身体にガタがきている、年金だけでは暮らせない」で、余り変わらない ⑤高齢者と聞いて余り良いイメージがなく、健康な人なんかいないと思っており悪いイメージしかなかった

出所:筆者作成

## 引用文献

- [1] 『中日新聞』2006年6月30日.
- [2] 岩下豊彦『SD法によるイメージの測定』川島書店、1983年.
- [3] 保坂久美子、袖井孝子「大学生の老人イメージSD法による分析」社会老年学、27号、1988年、pp.22-33.
- [4] 大塚邦子、正野逸子ほか「看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴を中心に—」老年看護学4（1）、1999年、pp.98-104.
- [5] 浅井さおり、沼本教子、柴田明日香「老人看護学学習過程にみる高齢者イメージ変化の縦断的な検討」日本看護教育学雑誌、Vol.16 No.1、2006年、pp.53~61.
- [6] 西尾和子、齊藤明子ほか「医学系学生の専攻分野別老人のイメージの傾向」藤田学園医学会誌、Vol.25 No.2、2001、pp.9-14.
- [7] 寺島喜代子、吉村洋子「看護学生の老人イメージについて—老人イメージスケールを用いて—」福井県立看護短期大学部論集、第8号、1998年、pp.29-37.
- [8] 内閣府『高齢社会白書 平成16年版』ぎょうせい、2005年、P.64.
- [9] 原沢優子、松岡広子ほか「老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題」愛知県立看護大学紀要、No10、2004年、pp.41-48.
- [10] 『中日新聞』2006年7月30日.
- [11] 黒田研二「老人として生きる」『学生のための医療概論』、医学書院、2004年、pp.125-134.
- [12] 前掲 7) pp.29-37.
- [13] 櫻庭けい子、瀧口起美代ほか「千葉市における痴呆性高齢者およびその家族支援に関する調査研究」看護研究、Vol.34 No.1、2001、pp.35-48.
- [14] 内閣府「高齢社会対策の実施状況」『高齢社会白書 平成16年版』ぎょうせい、2005年、pp.64-65.
- [15] 多田葉子「日本・スウェーデン比較」『高齢者の生活と意識 第5回国際比較調査結果報告書』内閣府、ぎょうせい、2001年、pp.293-303.
- [16] 吉村洋子、寺島喜代子「看護学生の老年観に関する研究—高齢者に関連する生活背景から—」福井県立看護短期大学部論集、第9号、1999年、pp.1-11.
- [17] 渡邊吉利「家族」『図説高齢者白書2005年度版』全国社会福祉協議会、2006年、pp.46-57.
- [18] 『朝日新聞』2005年7月26日.
- [19] 岡本英明、岡田進一、白澤正和「高齢者の社会活動における非活動要因の分析」社会福祉学、Vol.46-3、2006年、pp.48-62.
- [20] 内閣府「高齢社会白書の概要 平成18年版」Aging、夏号、2006年、pp.20-29.